

## とみらいテラス雑感 vol.11

### 閑話休題

「自己啓発」なんて真面目な話が3回連続になってしまいましたので、少し休憩といか、一服的な内容にしようと思います。

とは言っても、軽めの内容となると、私自身の軽さが露呈しそう（バレてるかもしれませんが）なので・・・あっ、「軽い」つながりで「ライトノベル」についての話にしようかな。今、「単純だなあ。」と思ったでしょ？

ともあれ、「ライトノベル」なるジャンルがいつ頃確立されたのか、私の感覚だと就職した後、しばらくした30歳前後だと思うので、西暦2000年前後だった気がします。ちゃんと調べた訳ではないので、正確とは言えないかもしれませんが、それ以前は「ファンタジーノベル」と呼ばれていた気がします。

氷室冴子先生の『銀の海 金の大地』や渡邊自由先生の『諸王の物語』などは、「ファンタジーノベル」と呼ばれていた記憶がありますが、仲町六絵先生の『からくさ図書館来客簿』や似鳥航一先生の『おまちしてます 下町和菓子栗丸堂』などは明らかに「ライトノベル」として手にしたものになります。

ところで、「ライトノベル」という名称については、「小説」のひとつのジャンルとして認識していますが、これは「推理小説」などの分類と同じで、内容の「重い・軽い」や作品の「良し悪し」を示すものではなく、「手軽に読める」（版型）や「軽快に読める」（テンポ良く読める）イメージを持っています。

年齢を重ねた今となっては、手に取りづらい感じすらしますが、今やネットでの購入も可能なので、読みたいものを入手しやすくなったなあ、感慨に耽ったりもしますね。

「ライトノベル」と軽くみて手にしていない方には、無理にとは申しませんが一度読んでみて下さい。私自身も最初は、書店で何気なく手にしたのが出会いですし、好き嫌いはあるかもしれませんが、それは「ライトノベル」に限った話でもないと思います。

そして、「ライトノベル」は、「読書が苦手」やそこまでではないものの読書習慣があまりないという、若い方々にも手にして欲しいと思っています。内容も多種多様ですし、きっと自分に合った一冊に巡りあうかもしれませんよ。

作家や編集者など多くの方々が、若い世代に読んで欲しいと思って、様々な取り組みをされていると感じる時があったりするので、ぜひ！

まあ、そんな時は「こんなオジサンで申し訳ありません m(\_\_)m」という、軽くない現実に直面する私ではありますけどね。

## とみらいテラス雑感 vol.12

### ライトノベル

前回、軽い感じで「ライトノベル」について、ひと休みの感覚で触れてしまいましたが、今回は真剣に「ライトノベル」について語りたいと思います。

「ライトノベル」は認めないという方もいるかもしれませんが、ここではそんな話ではなく、私が読んで面白いとか、考えさせられたとか、何かしらの影響を与えてくれた作品たちを紹介したいと思います。

まずは、漫画が原作だと後から知ったので要検討の作品でしたが、漫画を読んでいないのでセーフということで、朝霧カフカ先生の『文豪ストレイドッグス』を取り上げたいと思います。まあ、最近はメディアミックスが普通になってきているし、「卵が先か、鶏が先か」のような感じで結論は出さないということにして、何でそんなに紹介したいのかというと、「文豪」と呼ばれるちょっと敷居が高い感じの人々が、彼らの作品や逸話などをもとにしたと思われるキャラクターとして登場している点に尽きます。

これは、知っている「文豪」の方々であれば、「なるほど、そうなるのね。」といった感じでしたし、知らない「文豪」（名前だけは知っている程度という意味）の方々が登場した時は、読んだことのない作品を半身浴中にスマホ片手に「青空文庫」で読んでみたりして、新たな作品との出会いに繋がったりしたので、興味をもったら手にしてみてください。

次に、この作品も「ライトノベル」として良いか迷いましたが、小野不由美先生の『魔性の子』に端を発したと言われる〈十二国記〉シリーズは、新刊を心待ちにした作品です。数年前の最新作を手にした時は、嬉しかったな。

古代の神仙思想を取り入れた世界観も斬新でしたし、様々な国がそれぞれの特徴と歴史を背景に、「王と麒麟」の関係や「政治と人々の生活」が描かれており、理想と現実とのギャップの中で、至らない自分に気づき、足掻きつつも「成長」につなげることの大切さを教わった気がしています。

3つ目は、「ライトノベル」と言えば、西尾維新先生の『化物語』を始めとする〈物語〉シリーズが、真っ先に思い浮かぶほど思い入れがあります。

何が良かったのかというとネタバレになりかねないので、詳細は触れませんが、主人公を中心とした「言葉のキャッチボール」は新鮮でしたし、時々胸が熱くなることもあったりして、「毎回楽しく読むことができた作品でしたよね、ララララさん。」→「人の名前を歌うように呼ぶな！」→「失礼、噛みました。」→「違う、わざとだ！」→「かみまみた！」の流れが好物です。